

ボードリアール『消費社会の神話と構造』第三部後半

IV 気づかひの秘蹟

○消費社会の特徴・・・すべてがサービスとなる。

個人的サービスや心づけという形をとって与えられる。

・今日では単純に消費されるものはもはやなく、モノは、「あなた」という個性化された対象に奉仕する。⇒個人的給付という包括的なイデオロギー

【社会的転移と母性的転移】

○社会的再配分・・・集団的心理メカニズムを作動させる

- ・気前が良いと思われることに成功している
- ・母親や庇護者を思わせる名称が付けられている

⇒人々の心理に個人への「サービス」と福祉に努力する社会秩序という神話を植え付ける

【微笑のパトス】

○気づかひと真心と思いやりの絶えざる消費

- ・人間関係の喪失・・・社会の基本的特徴
- ・記号化された人間関係と人間的暖かさが消費される

【映画「プレイクタイム」、またはサービスのパロディ】

○気づかひのシステム・・・完全な矛盾のうちに成り立つ

交換価値の抽象化が一般化される⇒気づかひを生みだすはずが、社会的距離、コミュニケーション不能の状態、人間関係の不透明性と残虐性を生産かつ再生産してしまう

○「機能化された」人間関係

- ・「奉仕」の交換のいやらしい雰囲気⇒生身の人間の抵抗・・・古い時代の残滓
- ・今日では関係のシステムの機能性だけを担わされた人間関係が出現している

【広告と贈与のイデオロギー】

○広告の言説の特性・・・無償性の力を借りて商品交換に伴う経済的合理性を否定する
「ちょっとしたおまけ」・「無償の施し」

【ショーウインドウ】

ショーウインドウで成立するコミュニケーション・・・同じモノのなかに同じ記号体系と価値の位階コードを読み取り認識する

⇒価値形成の社会的過程が誰の目にも明らかになる場所

【治療する社会】

知識人・・・「病める社会」という大がかりな神話の創出に一役買っている
企業や官庁の専門家・・・交換の機能性を回復させ、新陳代謝をスピードアップさせる

【気づかひの曖昧さとテロリズム】

○PRや広告などの気づかひの機構は、恩恵を施し満足させると同時にこっそりと自分の利益になるように誘惑し方向を変えさせることを機能としている。

⇒平均的消費者は二重の企ての対象となる

○気づかひの魔術的レトリックが担う社会的機能

- 一、 やさしさについての再教育を行うとは
- 二、 広告活動（＝一種の恒常的国民投票）により社会過程全体を既定し得る
- 三、 <sollicitude>（気づかひ）と<sollisitation>（懇請）による内面的コントロール
 - ・ 広告は社会的審問・心理的抑圧のメカニズムを絶えず作動させている
 - “ひとりではいけない＝あなたにはひとりでの権利がない”

【計量社会学（ソシオメトリー）的融通性】【自己確証と同意】

○消費と流行のサイクルに入り込む・・・自分自身の存在の意味そのものを変えること
・「個性化」によって、個人はもはや自律的価値の中心ではなく、流動的相互関係の過程における多様な関係の一項に過ぎなくなる

⇒一種の計量社会学的グラフの中に引きずり込まれる

○「順応主義」か「反順応主義か」は問題ではなく、他人や多様な社会的立場や職業とできる限り摩擦を起こさないこと（ルシクラージュ）、あらゆるレベルでの社会的移動に順応できることが問題となる（＝皆と一緒に移動する）

・このような、絶対的価値を持たず、機能的融通性だけで成り立っている関係の中では、他人に同意や判断を懇請することで自己確証を得る

・「雰囲気」・・・人々の集団によって生産・消費されるさまざまな関係の漠然とした総和

【「誠実さ」信仰——機能的寛容】

○「本当の人間関係は消滅した、だからこそ誠実さ万歳というわけだ。」

・産業主義的な誠実さの文化では、誠実さも記号として消費される

○「寛容」の問題

対立しているイデオロギー、世論、美德と悪徳などももはや交換と消費の用具にすぎない⇒あらゆる矛盾したことがらが記号の組み合わせのなかで等価物となる

V 豊かな社会のアノミー

【暴力】

○消費社会とは気づかひの社会であると同時に抑圧の社会、平和な社会であると同時に暴力の社会である

・暴力・・・日常生活の安定が達成された瞬間ににじみ出てくる統御不能な暴力——目的も対象も持たない

⇒豊かさそのものの根本的矛盾・・・「破壊的行動」「集団の逃避的行動」「鬱状態」

・消費・・・自由の支配とは全く関係のない、倫理的かつ心理的強制の新しいシステムという側面を持つ。いかに幸福に対する条件反射（新しい道徳の支配）を起こさせるか。

・豊かさ・・・新しい型の強制のシステムにすぎないという仮説

「自由の強制」「管理された幸福を手に入れることの強制」「豊かさの強制」

○暴力さえも消費対象となる

【非暴力のサブ・カルチャー】

非暴力・・・生活の安定と利潤の追求を目標とする社会を拒否する

【疲労】

○現代の疲労には原因がない

消費することによって競争状態が普遍化され、社会が全体主義化される

⇒欲求と渴望の間の内面的ひずみ・不平等のもたらす社会的ひずみを生み出す

疲労（または無力症）は、このような社会に対する「受動的拒否」の形と解釈できる

○脱工業化社会に生きる市民の疲労・・・「スピードダウン」

・疲労とは慢性的かつ無意識的反抗という意味でひとつの活動である

一九六八年の五月革命・・・疲労はある日突然暴力に転換する

・疲労は鬱状態の一般的構造に位置づける必要がある⇒鬱状態の論理が消費の論理そのものを反映している

○鬱状態・・・労働の強制が終わり、充足の時間が始まる（と考えられる）瞬間にやってくる⇒「何かを行い」、「行動する」ことへの強迫観念的欲求が増大している

・疲労とノイローゼ・・・差異を表示するための文化的特性となる

とりわけ知識人や特権階級の人々の間では、疲労と欲求充足に関するあらゆる形態の儀礼が行われている

⇒文化的「アリバイ」・「消費される」疲労

結論 現代の疎外、または悪魔との契約

【プラハの学生】

○学生の像は売られる（＝商品の領域に属する）・・・具体的な社会的疎外
・『シュレミール』と「プラハの学生」では、金を（商品と交換価値の論理）を阻害の中心に据えている点で他の悪魔との契約譚より優れている

○疎外

「モノ（モノとなった魂、影、われわれの労働の生産物）は復讐を行う。奪い取られたものはすべてわれわれに否定的な意味で結びつく、つまり妄想となって取りつく。」

⇒われわれの生きた部分＝社会的労働力（労働の疎外？）

【超越性の終り】【亡霊から亡霊へ】

○悪魔との契約譚・・・ヨーロッパでは中世初期以来、自然支配の歴史的・技術的過程が始まった社会の中心的神話

○消費の時代は根源的な疎外の時代でもある

・商品の理論が一般化し、すべてが見世物化される

・「消費的人間は、自分自身の欲求と自分の労働の生産物を直視することもなければ、自分自身の像と向かい合うこともない。彼は自分で並べた記号の内部に存在するのである。」

⇒「反省」の不在・自分自身についての遠近法の不在

○消費は超越性を失わせ、すべてを記号秩序に包む

鏡→ショーウィンドウ→大量の記号化されたモノ→記号の秩序へ入り込む

【消費の消費】

○消費社会そのものが消費社会についての神話になっている

「悪魔」が「豊かさ」に、「悪魔との契約」が「豊かさの約束」へと取って代わった

○消費という神話

・われわれは自分たちの社会を消費社会と見なし、そのようなものとして語っている

⇒消費のイメージの消費（万人の合意に基づいている）

・「あなたの夢見る肉体、それはあなた自身の体です」＝「自己予言」

・消費の神話における独自の言説と反言説・・・絶えず消費社会を非難する